

現代のこゝろば

やまだ
山田 玲子



最近、無理をしすぎて身体がボロボロになっているのではな
いかと心配していたところ、健
康診断の結果は「A」。むしろ
健康状態はよくなっていた。安
心した反面、微妙にショックだ
った。なんとなく自分の頑丈さ
が間抜けな気がした。人間にか
ぎらず、環境に適応することで
進化を続けてきた生き物にとっ
ては、多少の負荷があったほう
がいいということかもしれない。

それにつけても思うのは、昨
今の「安楽」への志向である。

「苦労をする」、「励む」、「我
慢する」という精神文化は忌避
される傾向にあると感じる。モ
ノや情報が簡単に入手できるよ
うになったことの対比として、
待ったり我慢することが苦手に
なりつつあるのかもしれない。
しかし、将来に備えて能力や資
源を蓄積することや、現在の困
難を目標実現の過程であるとポ
ジティブにとらえることに、も
っと価値を見出してもいいので
はないか。

外国語の学習にも似たところ
がある。学習者は手っ取り早く

ガマンの英語学習

ペラペラになることを求める
が、外国語の習得は一朝一夕に
なるものではない。しかし、あ
きらめずに取り組めば必ず達成
できる。

例えば、日本人が苦手として
いるRとLの聞き取り。多くの
人が大人になってからでは無理
だとあきらめていたようだが、
コンピューターを使った聞き取
りトレーニングの実験を行った
ところ、約20時間続けることに
より、平均正答率が約7割から
9割に上昇した。この20時間を
長いととらえるか、短いととら
えるかは議論が分かれるところ
だろう。また、RとLを聞き分
ける能力は、英語学習における
ひとつのピース(要素)にすぎ
ない。英語がペラペラになるま
での過程は、こういうピースを
たくさん、我慢強く積み重ねる

ことの連続だ。

ところで、実験の結果からは、
60歳代の学習者でも20歳代と同
じ程度の訓練効果があることも
証明された。年齢に関係なく、
学習者本人の我慢により効果が
期待できるのだ。一方、子供た
ちの場合は、本人ばかりでなく、
親や教育関係者の我慢も必要で
ある。一律に強制することには
問題もあるが、我慢によって
育まれる適応能力を、多くの若
者が簡単にあきらめてしまうの
を看過し、将来の可能性をせば
めてしまつのはどうかと思う。
学習環境を整備・維持する我
慢、学校なら限られた時間数の
なかで英語使用を組み込む我
慢。これらは、工夫というより
我慢である。

外国人は、日本人にネイティ
ブのような英語を求めているわ

けではない。しかし、何を言っ
ているのかわからないという発
音ではさすがに困る。このあた
りに、日本人のための英語教育
の落としどころがあるのだが、
それを明らかにしていくことも
英語教育者や親の我慢といえ
る。

これからの日本人が生きる環
境は日本語だけで閉じた世界で
はない。国際社会の中で自身と
その帰属集団の利益や意思を
主張していかなければならな
い。こうした新たな環境に適応
することは、個人にとっても社
会にとってもストレスが多くな
るが、それは自身を強くし適応
能力を高めてくれる。そのため
に、われわれがすべき我慢は多
い。

(ATRラーニングテクノロ
ジー会長)